

川上宏奨学基金報告書

論文題目：「コミュニティ FM と災害：熊本シティエフエムの事例から」

2016 年度川上宏奨学基金を頂き、卒業論文「コミュニティ FM と災害：熊本シティエフエムの事例から」を無事執筆することができた。以下に、論文の内容、具体的な調査内容を報告したいと思う。

1. 卒業論文の要旨

本論文では、コミュニティ FM が災害時にどのような放送を行うべきなのか熊本シティエフエムの事例をもとに考察したものだ。

この論文の調査にあたり、熊本シティエフエムに 2 度訪問し、営業部の長生修氏にインタビュー調査を行った。

第 1 章で熊本シティエフエムが阪神淡路大震災の影響をうけ、「地域密着」「市民参加」「防災」を局のコンセプトとして開局したことがわかった。そして、熊本市という大都市圏の地域を放送エリアとする熊本シティエフエムは「校区」に注目している。「FM791 子ども新聞」の発行や熊本市内の小学校区の話や取り組みを紹介する「校区のチカラ」というラジオ番組など、「校区」という小さなコミュニティに目配りを行っていることが明らかになった。また、コミュニティ FM の中ではトップの売り上げを誇っており、熊本市の行政とも良好な関係を築きながら地域に根ざした運営を行っていることがわかった。

第 2 章で、熊本シティエフエムが開局時から熊本市と災害緊急放送に関する協定を結び、防災や災害関連番組を行ってきたことがわかった。また、熊本シティエフエムが災害関連情報を放送することを 2012 年に熊本市が緊急告知ラジオを導入したことで、地域の人々の間で認知された。2016 年 4 月 14 日、16 日に起きた熊本地震では、本震から 40 分後に自社送出に切り替わり、24 時間体制の放送を行った。そして、4 月 18 日から臨時災害放送局として放送を行った。大災害に対応できたのは、防災へ取り組んできた 20 年間の積み重ねのおかげであった。放送したのは被害状況ではなく、生活関連情報。リスナーから寄せられた情報も流した。また、避難所で生活する人々を励まそうと小学校の校歌のリクエストを行った。80 校の校歌を流し、「皆で大合唱した」、「涙がどつとあふれた」と反響があった。4 月 16 日の本震後から 5 月 1 日の通常放送に切り替わるまでに寄せられたメールは 3859 件。熊本シティエフエムは、生活関連情報という命を守るための放送、「校歌」を通じた前向きに生きるための放送を行った。

最後に今回の調査を通じてコミュニティ FM は、平時から防災に備える取り組みをすること、地域の人々からの信頼が重要であると考えられる。また、被災者が必要な放送とは、マス

メディアが報道するような被害状況ではなく、ガソリンスタンドやコインランドリーなどの生活関連情報やラジオから語りかけるパーソナリティの声や音楽による癒しの放送である。これは、マスメディアでは汲み取ることができないことであり、コミュニティ FM は、地域に密着した細かい出来事を丁寧に発信する放送を行うべきである。

2. 卒業論文を書き終えて

卒業論文を書き終えて、大学4年間で学んだ集大成をこの論文に記すことができたことに達成感を感じた。長生氏のインタビューで20年間の積み重ねが熊本地震の際の放送につながったことが分かった。いつ起こるかわからない災害に対して日ごろから防災の意識を高めることと地域からの信頼が地域メディアには必要であるとわかった。

3. 奨学金の主な用途

卒業論文を執筆するために、熊本県に2度訪れた。今回頂いた奨学基金は、熊本シティエフエムで長生市にインタビュー調査での往復のための交通費に充てた。熊本県への調査は費用が高く、奨学基金を頂けて大変助かった。

4. 最後に

本論文執筆にあたって、後押ししてくださった、故川上宏先生とご家族のみなさま、ご指導くださった森暢平先生にとっても感謝しております。本当にありがとうございました。